

「久々のホームラン」などい  
つては少々ちやかし過ぎかも知れ  
ないが、とにかく、三月十、十一  
両日の朝刊はそれほどの「傑作揃  
い」であった。

各紙とも十日付紙面で「北京―  
台北間の電話が開通した」との記  
事を載せたのだが、その扱いが社  
によってバラバラ。しかもその後  
これが国際電報の単なるミスが原  
因と判明したため、初日あまり  
にもデカデカと開通の「意義」を  
「ごち上げた社などは後始末に四苦  
八苦。編集デスクも穴があったら  
入りたかったに違いない。」

十日の紙面では、「朝日」は七  
面の中ほどに「北京と台北、東京  
経由で通話」という特派員電を掲  
載。十五行の短い記事で、扱いても  
外電の雑報欄である。「毎日」「東  
京」「日経」の三紙も外電面の隅  
に「北京―台北に直通電話、先月  
中旬から開通」という短いロイタ  
ー電を載せた。

日本のマスコミ中たに「社台北  
に支局がある」「サンケイ」は「北  
京から台北へ、もしもし」、本社  
特派員が「対話」と見出しからし  
て興奮気味。また北京と台北のや  
りとりを「邪物語」とよろしく一  
問一答形式で伝えたらうえ、よせば  
いいのにうれしさ余ってか台北特  
派員のへ注ぎまでつけ、「この通  
話は明らかに北京電話局からのタ  
イアル直通」などと、やぶへびの  
ミスをやっている。

だが、なんといつてもまじいの  
は「脱走」。特派員電を一面トッ  
プ五段に扱い、「北京―台北に電  
話開通、交渉開始へ一歩、東京経  
由、分製以來初めて」と大々的に  
報じた。

記事もリード部分で「これにつ  
いて北京では、台湾統一への重大  
なステップとして極めて重視して  
いる」と書いたあと、本文で「一  
月一日の米中国交成立以来、北京  
はこれまでの「台湾解放」という  
表現を「祖国復帰」という言い方  
に改めるなど、極めて柔軟な台湾  
政策を打ち出しているだけに、こ  
の電話開通が今後、双方の関係に  
どう展開されるかが注目されよ  
う」と、その意義について台湾統

一問題と絡めて熱烈なるペンをふ  
るっている。

ざっとこんな具合で、各紙の扱  
いには「月とスッポン」ほどの開  
きがあったが、大ニュースの判断  
を誤ったのか、それとも針小棒大  
をやったのかは翌日明らかにな  
る。この報道に驚いた国際電報の  
調査の結果、真相はオペレーター  
の勘違いによる単なるハプニング  
だったことがわかり、各社に連絡  
したためだ。

今度は「朝日」が「交換手うっ  
かり中継、協定なく出来ぬ業務、

# 誤報揃いぶみ各紙朝刊

## 北京―台北間の直通電話開通

### 翌日はあと始末に四苦八苦

へつなき、歴史的な国際電話が  
開通してしまつた」と、このハプ  
ニングを面白眺物にしている。

また「東京」と「日経」も「北  
京―台北直通電話の怪、KDDウ  
っかり中継、三国間の協定ないの  
に」と、いずれも社会面で「朝  
日」同様「政治色」抜き話題物  
として扱った。

しかし「サンケイ」は外電面で  
「直通電話思わぬ波紋、中国・平  
和文勢に利用？、台湾・警戒し防  
止策も」と政治的意義付けに固  
執。さらに「もしもし騒ぎは肝心  
の北京と台北よりも日本での反響  
が大きかったようだ。原因は電話  
の自動化システムが進んだために  
今度のような「直通」とか「開  
通」などの騒ぎになったのが真  
相」と、御本人の前日の興奮ぶり  
には素知らぬ顔。自分の記事は欄  
に上げて、騒いだ方が悪いと言わ  
んばかりなのは首を傾げざるを  
得ない。ひとつ読者の方から「サ  
ンケイ」へ「もしもし」ともちた  
いもの。

前日、大上段に構えた「脱走」  
も外電面で「つながらますよ、  
自信たっぷり北京オペレーター、  
台湾側「共産主義者の陰謀」と非  
難」と、振上げたごふしのやり  
場になく困惑の体。しかもこの  
記事は通信社電で、前日、「交渉  
開始へ一歩」などをそれぞれ「歴  
史的記事」を送ってくれた特派員  
氏の方は、「事後処理」はそっち  
のけに「人民日報」の転電などや  
って暇をつぎしている。

心臓というか破廉恥というか、  
民主化・近代化の「北京の春」と  
やらに浮かっているのも結構だが  
もし時間を頂けるなら、東京外大  
の中嶋雄雄教授が同日の「朝日」  
に寄せた「米中正常化以降、北京  
は台北に盛んに秋波を送っている  
が、現実の国際情勢の中で統一が  
そんなに生やさしいものでないこ  
とはちょっと考えればすぐわかる  
こと。今度の事件でそんなことを  
想像する人があれば、全くの幻想  
だ」との談話をじっくり読んで  
もらいたい。

国際電報」と社会面の三分の二を  
さいて張り切った。

「双方の間の国際電話の中継に  
は、北京、日本、台湾の三者間で  
その旨をどうたい、料金の配分など  
を決めた協定が結ばれていなければ  
ならないが、現在はそんな協定  
はなく電話はつながるはずはな  
い」「しかしこの時は国際電話の  
申し込みが多く忙しかったせいも  
あって、うっかり機械的に「台北